

熊本地震災害支援報告

～菊陽町への派遣をとおして～



菊陽町役場前の壊れた慰霊塔



熊本城 平成28年4月14日、16日
2度にわたる地震で被災

保健所運営協議会 平成29年3月30日

久留米市保健所 ©田原由起子、轟保則、成沢優子

●菊陽町の概要

- 菊陽町は、県都・熊本市の北東部に位置。急速に都市化が進む。

人口 40,513人 (H28.3.31)
世帯 16,239
出生 495人 (H27年度)
高齢化率 18.9% (H27.10.1)
人口の伸び率 熊本県内1位
全国16位

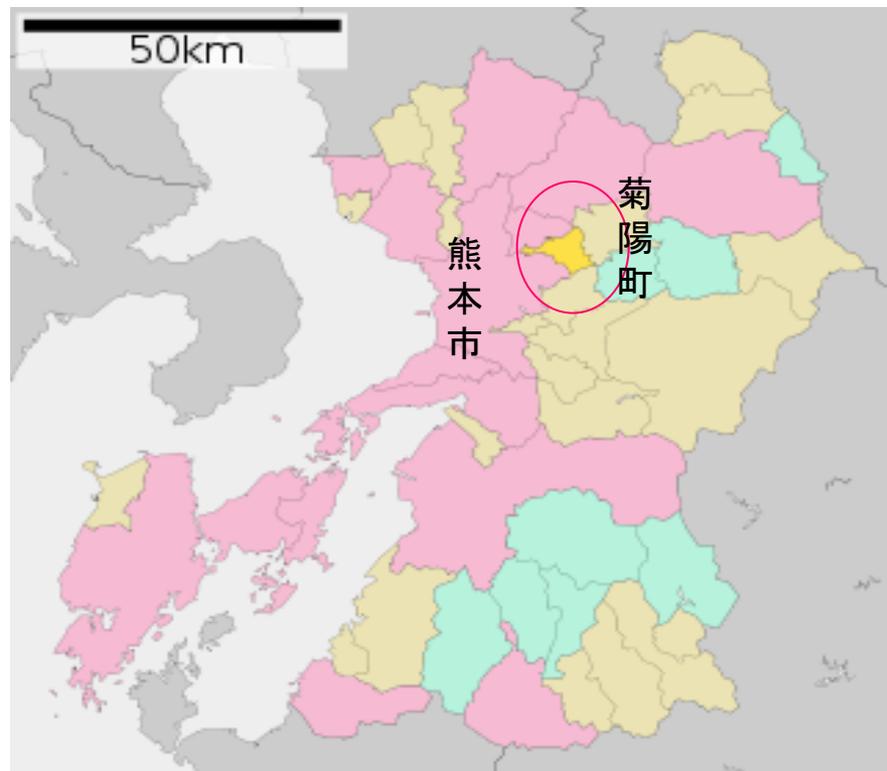
- 地震の概要 本震
平成28年4月16日
最大震度 6弱
死者 5人 (うち関連死5人)
避難所 14ヶ所 2,700人
車中泊含めると8,000人



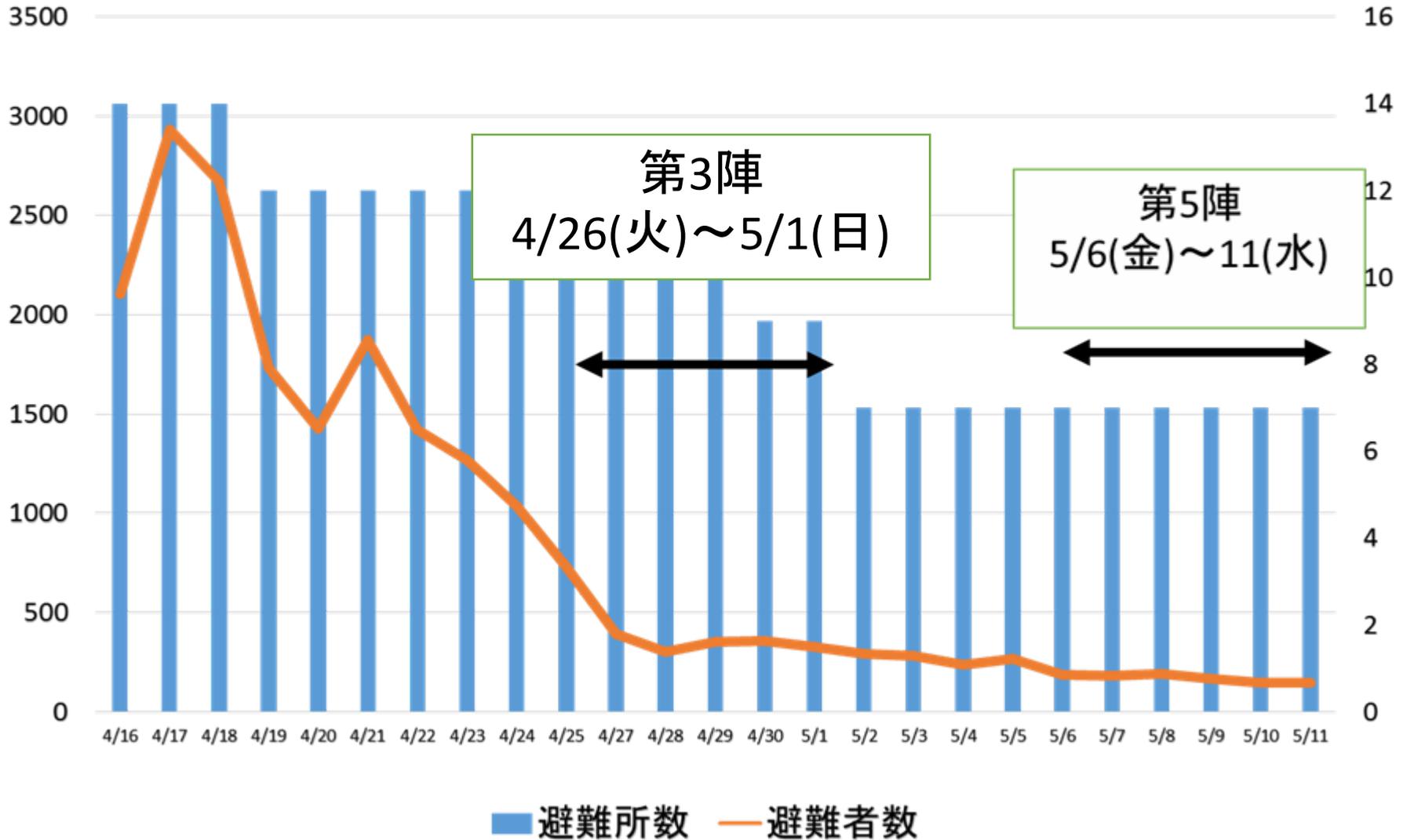
熊本空港
滑走路は菊陽町



菊陽にんじん



被災地の状況と派遣の時期



●3陣活動状況

～ 避難所での保健活動は縮小、要援護者の個別支援へ～

●平成28年4月26日(火)～5月1日(日) 5泊6日 地震発生から2週間

●活動内容:福岡県チーム担当避難所は6ヶ所

- ①4/27 避難所の衛生指導等、健康相談
- ②4/28～30 要支援者の家庭訪問
- ③5/1 救護所(避難所内)の健康相談

香川県チーム
(保健師2、事務職1)

北海道(DPAT)チーム
(精神科医師1、看護師2、事務職1)

●現地窓口:菊陽町役場 保健師 岩下係長
熊本県菊池保健所 保健師 坂井氏

●活動報告

1 避難所

(1)感染症対策

- ・第2陣から「感染症対策が徹底できているか確認して欲しい。担当者が変わると上手く引き継がれない・・・」
- ・職員等が1日3回清掃



(2)こころのケア

- ・20代 女性

「命からがら逃れて来た。逃げる途中に聞いた『助けてー』の悲鳴と瓦礫の下敷きになった人の顔が忘れられない。生きている自分は子育てさえ十分にできない。助からなかったほうが良かった・・・」

「避難所では子どもが寝ない。昨夜は7回起きた。泣き声が迷惑かけている・・・」

<対応>

- ・DPAT(災害派遣精神医療チーム)に紹介 → 同日面談実施
- ・菊陽町保健師の方へ報告し、8畳和室の避難所に移動。
母乳量の不足があり、ミルクの追加が指導されたとのこと。

●活動報告

(3)健康相談

- ・積極的に、とにかく笑顔で声を掛ける！
傾聴。必要時つなぐ。
「昼は自宅の片付け、夜は怖いので避難所で寝る」
「お風呂が怖い。明るいうちに入る。髪は服を着て洗う。」

2 家庭訪問

(1)町保健師の方から

- 「今後、在宅支援へとシフトしたい。対象者をどう選ぶか一緒に考えて欲しい」
- ・65歳以上の単身または高齢者世帯を訪問することになる
- ・半日×3日 31件訪問
- ・「1週間くらいはボーっとしていた。ようやく気分が楽になってきた。家族とは、よく喧嘩した。」
「余震が不安で眠れない」「人と話したくない」
- ・住民の受け入れは良く、感謝のことばが多かった。



避難所での活動



要支援者宅への家庭訪問

●活動報告

3 救護所

(1)民生委員活動

・90代男性 独居高齢者

「毎週毎週、支援チームに注意深く見守って欲しいといっている。情報は十分に伝わっているか？」と注意を受けた。

【対応】

個人台帳を作成し、確実に次のチームに引き継ぐよう改めた。

4 活動をとおして

(1)食生活

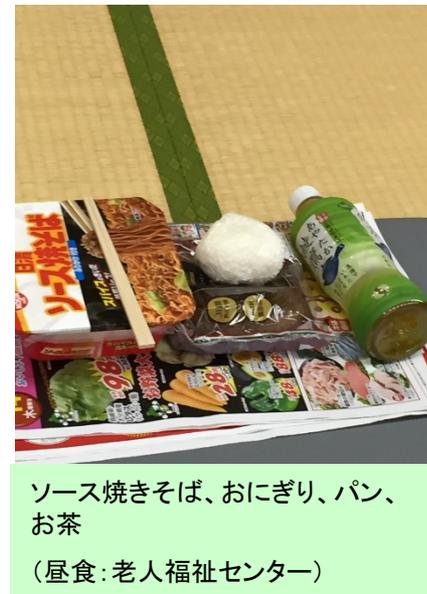
炭水化物が多く味が濃い

(2)日常生活

保健師が運動教室を開催

(3)避難者の区域分け

車いす使用者、幼児、ペット連れ



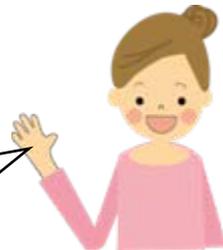
●活動を振り返って

- ・保健師、事務職のチームは効果的
- ・初期は感染症対策と心のケアが重要
- ・DPAT、DMATなど様々な支援団体が入り、情報の一元化は難しそうな印象。
- ・DMATから支給された「弾性ストッキング」に感謝の声
- ・自立できる方は元の生活に戻り、フォローが必要な方が避難所に残っている印象。

●市に戻って

- 1 活動報告会
- 2 市マニュアルの見直し
- 3 災害支援物品確認

日頃から、自分の業務以外にも関心を持ち 災害派遣には、進んで行く。
被災地から学ぶ姿勢が大切！



弾性ストッキング

浮腫がひどかったが3日でよくなったと喜びの声

1日2回脱ぐのは高齢者には難しいという声も



災害支援リュック内の物品確認

●久留米市で地震が起きたら(支援と受援)

1 避難者支援を経験して

- ・被災者の受けたストレス、需要までの経過を理解し、今どの段階にいるのか考え、なぜその言葉を発しているのか考え対応する。
- ・平時から準備を整える
- ・避難者の居住自治体との情報共有、連携



災害活動用リュック 物品の確認

2 被災地派遣経験を踏まえて

- ・保健師と事務職のチームが効果的
- ・様々な団体が応援に駆け付けます。何処にどんなチームが入ると被害が最小限に抑えられるか「受援」の視点でのマネジメント力が必要

DMAT(災害派遣医療チーム) 、DPAT(心のケアチーム)
リハビリチーム、管理栄養士チーム、災害支援ナースなど



久留米市(福岡県チーム)、香川県、
北海道(DPAT)チーム
菊陽町にて